

2012年3月10日

社会言語科学会 第29回研究大会 **ワークショップ1**

会話データ分析のむこう ー社会的貢献の可能性を考えるー

企画責任者: 中井陽子(東京外国語大学)

話題提供者: 大場美和子(広島女学院大学)

寅丸真澄(早稲田大学)

加藤好崇(東海大学)

指定討論者: 三牧陽子(大阪大学)

I. 本ワークショップの 趣旨と内容

「会話データ分析」

話し言葉のデータを扱った様々な分析
の総称

「会話データ分析のむこう」

会話データ分析の社会的貢献
の可能性

本ワークショップの進行

第1部 15:15-16:35 (80分間)

I. ワークショップの趣旨説明		中井	分間
II. 会話データ分析のむこうを考える			
III. 話題提供	①接触場面の分析	加藤	20分間
	②メディアの分析	大場	20分間
	③教室談話の分析	寅丸	20分間
IV. 話題提供のまとめと考察		中井	5分間

休憩(10分間)

第2部 16:45-17:45 (60分間)

I. 講評・指定討論	三牧	20分間
II. 全体討論	フロア	35分間
III. 全体統括	中井	5分間

本ワークショップの進行

第2部 全体討論 内容

- (1) 会話データ分析はどのような**社会的貢献**ができるか
- (2) 会話データ分析の意義を**社会にア**ピールしていくためにはどうすればよいか
- (3) 会話データ分析を行う**様々な分野で連携**していくにはどうすればよいか

本ワークショップ 「会話データ分析のむこう」の趣旨

様々な会話や現場の会話データ分析者が
連携して**知見を共有する**きっかけとなる
ことを目指す。



「**会話データ分析の社会的貢献の
可能性**」を考える機会とする。



以上の議論を通して、

本ワークショップでの議論から～

参加者一人一人が
自身の「研究」「実践」「社会的貢献」
の繋がりを考え直す機会としたい

II. 会話データ分析の むこうを考える

中井陽子

東京外国語大学

留学生日本語教育センター

1. 会話データ分析の意義と可能性

「会話データ分析」:

- ・ 録音・録画・文字化した会話データによって、実際の言語行動が客観的・詳細に記述・分析される。



社会の実態を
あぶり出し, 問い直し, 改善していく

社会言語科学会

「ウェルフェア・リングイステイクス」
(徳川・ネウストプニー, 1999) の理念



言語を人間・文化・社会との関わりから
研究し, その成果を社会に役立てる

会話データ分析

「ウェルフェア・リングイステイクス」
の観点から、意義を再考する必要



1つ1つの会話データ分析の
社会的な意義と貢献の可能性を検討し、
より役立てる

会話データ分析

「トランスディシプリナリー」
(徳川, 1998)



様々な研究分野での会話データ分析の
手法や社会的な貢献の成果を共有

2. 会話データ分析のむこう と分析枠組み

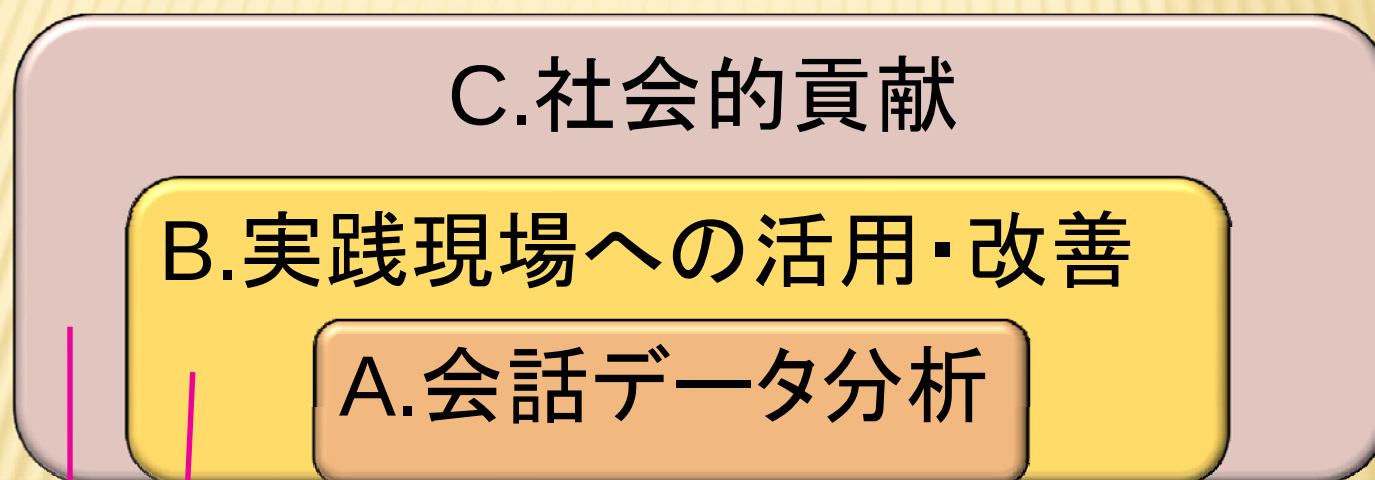
A段階：会話データ分析を行う段階

B段階：会話データ分析の成果を
個々の実践現場で活用し
改善に役立てる段階

C段階：会話データ分析の成果を広く
様々な実践現場で活用し改善に
役立てる段階（社会的貢献）

【図1】会話データ分析の社会的貢献の段階

会話データ分析のむこう



実践現場：

社会の中で人々が日々の暮らしを営む場

「 $A \Rightarrow B \Rightarrow C$ 」の3段階の2タイプ

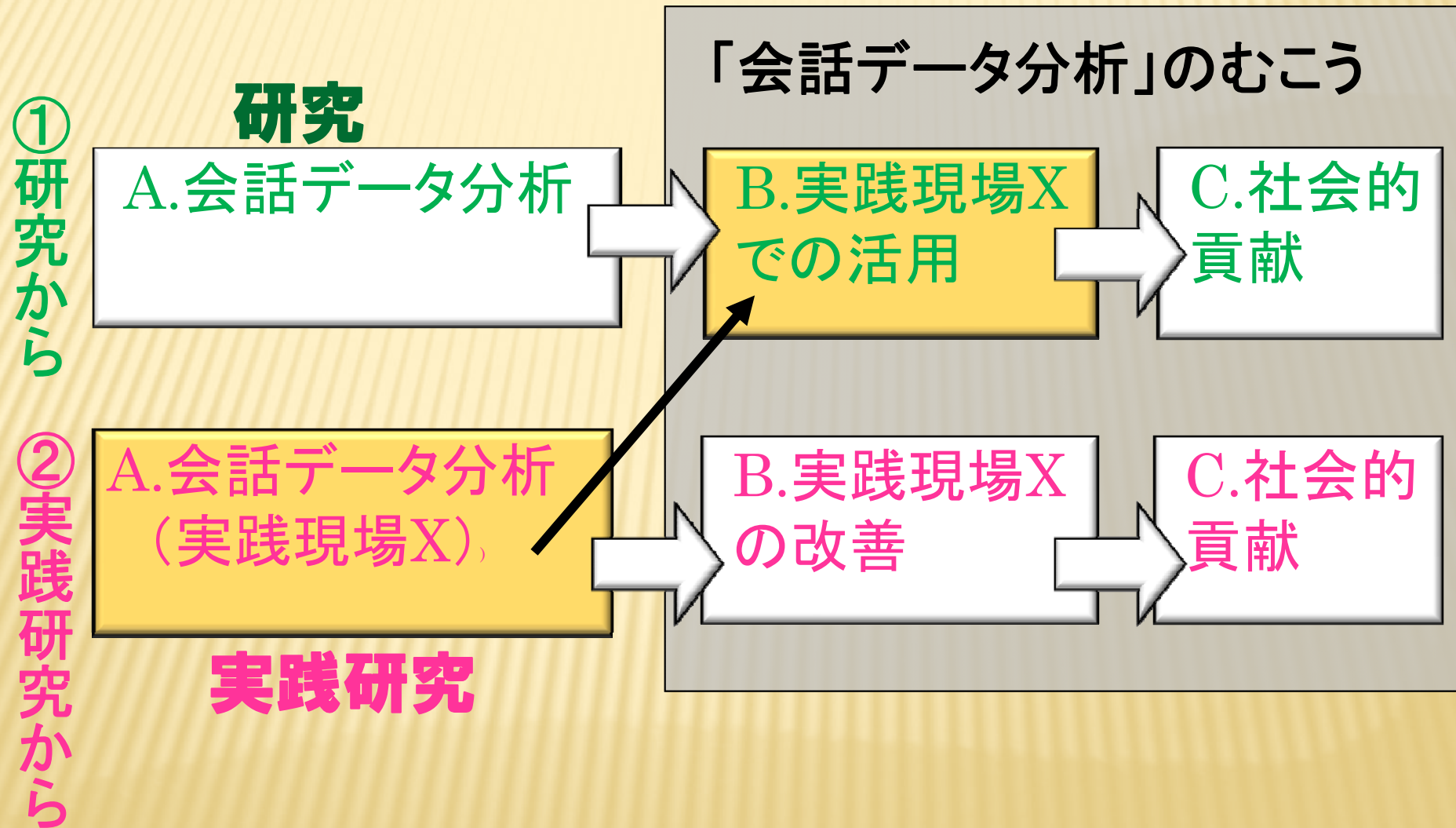
①研究からスタートするもの：

A.研究としての会話データ分析の段階
 $\Rightarrow$ B段階 $\Rightarrow$ C段階

②実践研究からスタートするもの：

A.実践研究としての会話データ分析の段階
 $\Rightarrow$ B段階 $\Rightarrow$ C段階

【図2】「①研究からスタート」 「②実践研究からスタート」の3段階



【表 1】 会話データ分析のむこうの3段階とタイプ

	①研究から スタートするもの	②実践研究から スタートするもの
A.会話 データ分析	・会話データの 分析から実態を 探る研究	・実践現場の会話 データの分析から 実態を探る実践研究
B.実践への活 用・改善	・個々の実践現場 への活用	・個々の実践現場の 改善
C.社会的貢献	・様々な実践現場への貢献	

【表 1】 会話データ分析のむこうの3段階とタイプ

	①研究から スタートするもの	②実践研究から スタートするもの
A.会話 データ分析	・会話データの 分析から実態を 探る研究	・実践現場の会話 データの分析から 実態を探る実践研究
B.実践への活 用・改善	・個々の実践現場 への活用	・個々の実践現場の 改善
C.社会的貢献	・様々な実践現場への貢献	

A段階：「①研究からスタートするもの」

様々な会話データの分析

- ・自然会話
- ・タスクの会話
- ・雑談
- ・機能性の高い会話
- ・メディア談話
- ・コーパス会話 など

母語話者と非母語話者の会話

- ・「母語(内的)場面」(母／母)
- ・「接触場面」(母／非)

【表 1】 会話データ分析のむこうの3段階とタイプ

	①研究から スタートするもの	②実践研究から スタートするもの
A.会話 データ分析	・会話データの 分析から実態を 探る研究	・ 実践現場 の会話 データの分析から 実態を探る 実践研究
B.実践への活 用・改善	・個々の実践現場 への活用	・個々の実践現場の 改善
C.社会的貢献	・様々な実践現場への貢献	

A段階:「②実践研究からスタートするもの」

様々な実践現場の会話をデータの分析
教育・医療・介護・育児など

「実践研究」

実践現場のデータを分析し、

授業改善や教師の成長を図るもの

実践に関与する当事者自身がその実践現場の
分析を行い現場の改善を図るもの

(例:教師による教室談話分析)

【表 1】 会話データ分析のむこうの3段階とタイプ

	①研究から スタートするもの	②実践研究から スタートするもの
A.会話 データ分析	・会話データの 分析から実態を 探る研究	・実践現場の会話 データの分析から 実態を探る実践研究
B.実践への活 用・改善	・個々の実践現場 への活用	・個々の実践現場の 改善
C.社会的貢献	・様々な実践現場への貢献	

B段階：「①研究からスタートするもの」

会話データ分析の成果が（A段階）⇒
個々の実践現場で活用される段階

（例）

- ・日本語クラスで、
あいづち・質問表現を
学習項目として活用（中井, 2010a, b; 2012等）
- ・社会言語学や異文化教育の講義で、
会話データ分析の知見を導入

【表1】 会話データ分析のむこうの3段階とタイプ

	①研究から スタートするもの	②実践研究から スタートするもの
A.会話 データ分析	・会話データの 分析から実態を 探る研究	・実践現場の会話 データの分析から 実態を探る実践研究
B.実践への活 用・改善	・個々の実践現場 への活用	・個々の実践現場の 改善
C.社会的貢献	・様々な実践現場への貢献	

B段階：「②実践研究からスタートするもの」

個々の実践現場の会話データ分析の
成果から（A段階）⇒
その実践現場の改善を目指す段階

【表1】 会話データ分析のむこうの3段階とタイプ

	①研究から スタートするもの	②実践研究から スタートするもの
A.会話 データ分析	・会話データの 分析から実態を 探る研究	・実践現場の会話 データの分析から 実態を探る実践研究
B.実践への活 用・改善	・個々の実践現場 への活用	・個々の実践現場の 改善
C.社会的貢献	・様々な実践現場への貢献	

C段階：「①研究からスタートするもの」

A段階：会話データ分析⇒

B段階：個々の実践現場への活用⇒

C段階：広く様々な現場に

有益な知見を提供する段階

(例)

- ・「研究と実践の連携のモデル」の提案

会話データ分析⇒会話クラスで活用

(中井, 2010a, b; 2012等)

- ・教材開発

C段階：「②実践研究からスタートするもの」

A段階：会話データ分析（個々の実践現場）⇒

B段階：その実践現場の改善⇒

C段階：広く様々な現場に

有益な知見を提供する段階

（例）

- ・実践現場への提言
- ・実践研究の意義の提言

3. これまでの会話データ分析に関する研究

会話データ分析を行う論文の最新号 の「 $A \Rightarrow B \Rightarrow C$ 」段階の分析

(会話データ分析の論文68件／全188件)

『日本語教育』 2005, 2009～2011 (18／79件)

『社会言語科学』 2008～2011 (29／56件)

『社会言語学会大会論文集』 2010 (21／53件)

中井・大場・寅丸(2011)

中井・大場・寅丸（2011）

『日本語教育』

- ・ A段階が少し（3/18件）

研究成果を教育現場に
活かす目的が明確

- ・ B段階が多い（10/18件）

例）指導学習項目化する、教室活動への提案

- ・ C段階も見られた（5/18件）

例）学習者の社会生活の支援向上を目指す

社会状況の改善が目的

中井・大場・寅丸（2011）

『社会言語科学』

会話データ分析で
社会の実態を把握する

- ・ A段階が多い（16/29件）
- ・ C段階も見られた（5/29件）

人間・文化・社会から言語を研究し、
その成果を社会に役立てる

- （例）
- ・ 批判的談話分析の手法を生かした教育実践の有効性の検証
 - ・ 法廷通訳の談話の分析
 - ・ 継承語教育の現場の分析

中井・大場・寅丸（2011）

『社会言語科学会大会発表論文集』

- ・ A段階が少し（5/21件）
- ・ AC段階が多い（15/21件）

談話の中の現象を
詳細に記述する

（例）

- ・ 基礎的研究
- ・ 研究手法の確立
- ・ 先行研究の検証

具体的な実践現場への
提言ではなく、
研究の積み上げに貢献

参考文献

- 中井陽子(2010a).インターアクション能力育成を目指した会話教育—
教師と学習者による研究と実践の連携の必要性— 博士論文 早稲田大学大学院
日本語教育研究科
- 中井陽子(2010b).第3章作って使った後で 尾崎明人・椿由紀子・中井陽子(著)
日本語教育叢書「つくる」会話教材を作る スリーエーネットワーク pp.192-216.
- 中井陽子(2012).インターアクション能力を育てる日本語の会話教育 ひつじ書房
- 中井陽子・大場美和子・寅丸真澄(2011).会話・談話分析の社会的意義の考察—
掲載論文の分析をもとに— 修剛・李运博(主编)跨文化交际中的日语教育研究②
異文化コミュニケーションのための日本語教育 高等教育出版社pp.628-629.
- ネウストプニー, J.V. (1995).新しい日本語教育のために 大修館書店
- 大場美和子・中井陽子・寅丸真澄(2011).会話・談話分析の手法を用いた研究論文の
社会的意義の考察—学会誌『日本語教育』掲載論文の分析をもとに—. 2011年度
日本語教育学会研究集会第10回中国地区(広島)予稿集pp.51-56.
- 徳川宗賢(1998).「社会言語科学」の創刊にあたって 社会言語科学, 1(1), 1.
- 徳川宗賢・J.V.ネウストプニー(1999).ウェルフェア・リングイスティクスの出発 社会言
語科学, 2(2), 89-100.

III. 話題提供

- ① 接触場面の分析：加藤
- ② メディアの分析：大場
- ③ 教室談話の分析：寅丸

話題提供①②③

①研究からスタートするもの：

A.(研究:会話データ分析)

⇒B(実践現場の活用)⇒C(社会的貢献)

① 接触場面の分析：加藤

② メディアの分析：大場

②実践研究からスタートするもの：

A(実践研究:会話データ分析)

⇒B(実践現場の改善)⇒C(社会的貢献)

③ 教室談話の分析：寅丸

VI. 話題提供のまとめと考察

話題提供①②③のまとめ

①研究からスタートするもの：

A.(研究:会話データ分析)

⇒B(実践現場の活用)⇒C(社会的貢献)

① 接触場面の分析：加藤

② メディアの分析：大場

②実践研究からスタートするもの：

A(実践研究:会話データ分析)

⇒B(実践現場の改善)⇒C(社会的貢献)

③ 教室談話の分析：寅丸

話題提供①②③のまとめ

A. 会話 データ 分析 (実態)	①研究 から	・加藤: 初対面の接触場面分析 ・大場: 取材談話とニュースの比較分析
	②実践 研究から	・寅丸: 教室談話の分析(実践研究)
B. 実践 への活 用・改 善 (個々 の実践 現場)	①研究 から	・加藤: 自己調整能力の育成 ・大場: 会話データ分析の紹介, メディア・リテラシーの育成
	②実践 研究から	・寅丸: 教師の「省察」, 学習や教室活動の意義の再考, 授業改善
C. 社会 的貢献 (様々 な実践 現場)	①研究 から	・加藤: 共生の規範とその管理 ・大場: 他分野との問題の共有, 知見の教育現場への還元の議論
	②実践 研究から	・寅丸: 問題の共有, 経験と知見の還元, 学習者の社会性の育成

議論のさらなる発展

会話データ分析の 社会的貢献の具体的なあり方の検討



個々の会話データ分析を(A段階)

個々の実践現場で活用・改善するだけでなく(B段階),

それを広く社会にいかに役立てられるかを
常に意識し続けること(C段階)が重要

- ✕ 自身の研究の1つ1つが具体的にどう社会と繋がっているのかを意識
- ✕ 「C. 社会的貢献」(マクロレベル)だけを見るのも十分ではない
- ✕ 社会について、実際の会話データから丁寧にみていく(ミクロレベル)ことが重要
(ネウストプニー, 1995)

- × 会話データ分析では、ある現象の一部
- × 多様で動態的な実態を単純化しないようにすべき
- × 教員養成課程や言語クラス：
会話データ分析の訓練で、
会話の分析力・調整力を育成
(中井, 2010a; 2012等)

会話データ分析の有効性

- × 実践現場への活用
- × 実践現場の分析
- × 会話をみる視点の育成

参考文献

- 中井陽子(2010a).インターアクション能力育成を目指した会話教育—
教師と学習者による研究と実践の連携の必要性— 博士論文 早稲田大学大学院
日本語教育研究科
- 中井陽子(2010b).第3章作って使った後で 尾崎明人・椿由紀子・中井陽子(著)
日本語教育叢書「つくる」会話教材を作る スリーエーネットワーク pp.192-216.
- 中井陽子(2012).インターアクション能力を育てる日本語の会話教育 ひつじ書房
- 中井陽子・大場美和子・寅丸真澄(2011).会話・談話分析の社会的意義の考察—
掲載論文の分析をもとに— 修剛・李运博(主编)跨文化交际中的日语教育研究②
異文化コミュニケーションのための日本語教育 高等教育出版社pp.628-629.
- ネウストプニー, J.V. (1995).新しい日本語教育のために 大修館書店
- 大場美和子・中井陽子・寅丸真澄(2011).会話・談話分析の手法を用いた研究論文の
社会的意義の考察—学会誌『日本語教育』掲載論文の分析をもとに—. 2011年度
日本語教育学会研究集会第10回中国地区(広島)予稿集pp.51-56.
- 徳川宗賢(1998).「社会言語科学」の創刊にあたって 社会言語科学, 1(1), 1.
- 徳川宗賢・J.V.ネウストプニー(1999).ウェルフェア・リングイスティクスの出発 社会言
語科学, 2(2), 89-100.

第2部 全体討論のテーマ

- ➡ (1) 会話データ分析はどのような**社会的貢献**ができるか
- ➡ (2) 会話データ分析の意義を**社会にアピール**していくためにはどうすればよいか
- ➡ (3) 会話データ分析を行う**様々な分野で連携**していくにはどうすればよいか